

# 異次元のクソボケ

逆しま茶

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメに寄せて、走るの大好きなサイレンススズカのトレーナーが悲劇を回避しようと頑張った結果、クソボケになってしまったお話。基本的にキャラスト風に出会いを書いた後イチヤイチヤするだけの予定です（本作は『異次元の寂しがり屋』のアンケートに基づくハーレム／個別展開IFルートになります）

# 目次

プロローグ

マンハッタンカフェ：1話

23

1



## プロローグ

「んぐぐぐ、み、見えない…っ」

人が、多いっ！

超満員の東京レース場、ウマ娘のパワーでなんとか抜け出したものの、身長が足りずに肝心のレースが見えない。レースの熱狂で気づいていないヒトを無理に押し退けたら怪我しちゃうかもだし、と焦る気持ちを抑え込んでいるものの。

『さあシンボリルドルフは6〜7番手で第三コーナーを通過！』

「ま、間に合わないじゃんか〜！」

こうなったら無理やりにも——！

心の中で悪魔が囁いたところで、見知らぬ誰かに手を引かれた。

「親御さんはどうしたガキンチョ。あと前譲つてやるから跳ね飛ばすなよ」

「ガキンチョじゃなくてトウカイテイオーだいつ！ あ、ありがとねー。でも今日は一人で来たから問題なしっ！」

知らない人に付いていくな、と言われていられるけれど譲ってもらおうだけだからセーフ！  
まだ学生っぽいけれど、すぐく年上っぽいことしか分からないお兄さんに譲ってもらい——見えた。

「——わあ！」

『四コーナーを回った！ 最後の直線後方も一気にやってくる！ 外からシンボリドルフ！ 外からシンボリドルフが来た！』

やっぱりかっこいい！

シンボリドルフさんっ！

「えええ……トウカイテイオーお……？」

「うわあああああつ、つははは！ かつこいい……！」

その時の光景を、きつと忘れない。

誰にも止められない、誰にも追いつけない。鮮烈な走り。

あんな風になりたい——そんな運命的な何かを、ボクは感じた。

「よーっし、シンボリドルフさんに会いに行っちゃお！ ありがとうね、お兄さん！」  
「いや、お前……——流されてるぞ」

そういえば凄い人ばかりだった!?

前が見えない！

「うわーっ!? ちょよ、ちょつとお! これじゃどこ行けばいいのかわかんないよー!?」  
「……………ええ〜」

『才能と努力と運、その三つを完璧に備わっていないと、だからね』  
『君の名前を聞いてもいいかな——覚えておこう』

「才能と努力と運、かあ……………よーっし、やるぞー! まずはトレセン学園に、だよね!」  
「なんで俺は巻き込まれているんだろう……………」

道案内してもらったさつきのお兄さんは遠い目をしているけれど、なんやかんやで面



倒見がいい。電車賃しか持つてなくてお腹空かせてたらホットドッグとはちみー奢つてくれたし。

「トレセン学園かあ………トレセン学園ってどうやってたら入れるの？」

「何故俺に聞く。……毎年入学試験をやってるからな、基本的にレースが走れて、最低限の学力があれば入れるぞ」

「??? じゃあいつ入れればいいの？」

「本格化がある程度近くなったら、だな。基本的に学費は高いからよほど裕福でないとなあるいは本格化が早くなければそんなに早く入学することはない。中等部からが一般的だな」

「お兄さんけっこう詳しいね、実はトレーナー？」

「トレーナー志望の学生だよ」

「へえー」

トレーナーになるのって結構大変って聞いたような気がするけど。

じいーつとお兄さんの顔を見ると、シンボリルドルフさんほどじゃないけどまあ悪い人じゃなさそう。はちみーくれたし。

「じゃ、ちよつとボクの走りも見てみてよ！」

「どうした急に……まあいいけど」

「ふふーん、どんよくなのはイイコトだと思うよ」

「意味分かってんのか……？」

これでも近所の子とのかけっこじゃ負けたことなかったし、自信はあった。軽く走ってみて、褒められたいくらいの軽い気持ちだった——のだけど。

「あ、ちようど知り合いがいたから一緒に走ってみてくれるか？」

「え？ うん、いいけど」

——そうして呼ばれてきたのが、少し年上に見える栗毛のウマ娘だった。

---

「——いやあの、スズカは？」  
「走りに行ったよー」

「……ゼファーは？」

「すみません、先ほどまでいたのですが……」

チームリギルの広い部室、その一角を借りてホワイトボードを置き、サブトレとして担当しているメンバー——サイレンススズカ、グラスワンダー、トウカイテイオー、ヤマニゼファー、アドマイヤベガ、マンハッタンカフェを集めてミーティングをやる、つもりだったのだが。

集まったのは4人。召集に応じてくれた率なんと7割。

しかもテイオーは優雅に紅茶を嗜んでるし、カフェはそっぽ向いてコーヒー飲んでるし、真面目に聞いてくれそうなのがグラスとアヤベだけなんです。それがそれは。

「くっ、仕方ないこのまま始めるぞ！ ……始めるよ？ あのー、カフェさん？」  
「………なんですか。話は聞いています」

絶対零度の声を浴びせられ、横で「私しーらね」という顔でお菓子をつまんでいる //

お友達”にも視線で助けを求めるが「無理でしょ」みたいな肩を竦めるジェスチャー。

「いやあの、すみません。この前のことは謝るのでこっち向いて聞いてください……」  
「はあ……」

何が悪いって、この前「1時に出かけましょう」と言われて、怪異のことだと思って深夜1時に出かけようとしてすっぽかした俺が悪いのだが！

心なしかいつものジト目と違いナイフのように鋭い気がする…。

「私もすっぽかしても良いと思いませんか？」

「……ごめんなさい、許してください」

「グラス的にはどうー？ デートすっぽかす男って」

「……そのー。……まあ、悪気がなければまだ……」

「まったく仕方ないなあ、トレーナーは(にやにや)」とでも言いたげなテイオーと、エ

ル相手なら「腹を切りなさい」とか言つてそんなグラスもいるので針の筵である。デートじゃないけど…。

デートと聞いて「学生と何やってるのよ」と言いたげな視線のアヤベに「いや違うかな」と視線で返す。が「ふん、どうだか」とでも言いたげな冷めた視線を返された。哀しい。

「まあボクなら遅刻なんて許さないけどね！」

「……………」

「……………」

「……………ふーん」

「うっ……………」

まあ遅刻どころかすっぽかして気づかないのは言い訳のしようも無い。何故か四人の間でも見えない火花が散ってる気がするが多分気のせい。

「ふう。気持ち良かった……あら、トレーナーさん？」

「スズカア！ ミーティングあるから座れ」

すいーつと部屋に入ってきたのはジャージ姿のスズカ。

よしこれで空気が変わる！ テイオーとカフェとアヤベからジト目を向けられているのを感じつつも椅子を出して促す。

「あっ……すみません、忘れていました」

「ちなみにゼファーは見てない？」

「……ええつと、見たような気がするんですけど……何処だったかしら」

「仕方ない後で俺が個別に説明しておくからミーティングしよう。な！」

というわけで無理やりミーティングに。

最初の議題は次走方針から。

「とりあえずスズカは国内のマイル〜中距離を走りつつ米国のダート挑戦だろ」  
「はい。BCターフは制覇できましたし……」

クラシック級で天皇賞秋を制覇、シニア級でBCターフを制覇して重賞7連勝中のスズカはまさしく異次元の逃亡者。アメリカではダートが主流なこともあり、今年はそちらに挑戦予定。怪我もしてないし、トレーナーとしても鼻が高い。

「アヤベはダービー取ったとはいえ体調が優れないから無茶はしないように」  
「……分かってる」

妹さんの問題がカフェのお陰で解決したので、少しばかり余裕のあるアヤベ。少しだけ優しい表情で頷いてくれた。



「テイオーは今年がクラシックだからな。徐々に練習の強度も上げてくぞ」

「期待しててよね。カイチョーに追いつくのがもちろん一番だけど、スズカにも勝っちゃうから」

一応、せっかくなので挑戦したホープフルステークスでは圧勝。

既に三冠バ候補と大々的に取り上げられているのだが本人は余裕の表情。スズカとかグラスもそうだが、プレッシャーに強いよなあ…。

スペちゃんとかは比較的緊張してた印象だが。

「グラスはマイルCSと有マに勝って、今度は迎え撃つ側だな。マークも厳しくなると思うしその辺の対策もしてくぞ」

「はい。よろしくお願いたします」

スズカがBCターフに行ってる間にグラスは毎日王冠でエルコンドルパサーに勝利。マイルCSと有馬記念にも勝って現役最強の呼び声も聞こえてきている。どちらかというスズカに勝てると思えばグラスかエルコンか、という感じだが。

「カフェはまだ本格化が来てないからな。……引き続き調整してくぞ?」  
「……………はい」

いつぞやのテイオーみたいに「早くデビューさせてよー!」とかならないのは助かるのだが、溜め込んでいないかは正直気になる。

怪異の影響なんかもあり体重も安定しにくいし…。

——實際のところは、全く別のところで溜め込んでいたわけなのだが。

「じゃあトレーナー、練習行こう」

「では走ってきますね」

「今日のメニューはどうしましょうか」

「……」

我先にと飛び出して行くスズカ、急かしてくるティオー、横に付くアヤベ、一歩後ろのグラス。背後から付いてくるカフエ。どっかでふらふらしているゼファー。

年頃の女の子は何考えてるのかさっぱり分からん……。実は背後でウチのトレーナークソだわー、とかなってないかな……。なんて不安を抱えつつも、それなりに頑張ってたトレーニングメニューを取り出す。

スズカは足の負担を少しでも減らせるようにストレスにならない限界までプールとかで調整しつつ筋力強化。ティオーも脚のバネの負担を軽減できるように念入りなス

トレッチの後に各可動域の筋トレを、機器を使って遠心性収縮も取り入れつつ実施。  
アヤベは調整のため軽めのプール。

グラスはオーバーワークしないようにプールで徹底的に苛め抜きつつスタミナ強化。  
カフェもプールで……ってこれプールばかりだな。一応ゼファーは気質と負担を  
考えてウツドチップ。

「だからスズカはこっち」

「そんな……まだ走り足りないのに……」

「プール10本終わったなら好きだけ走って良いから」

「うう……それはもう走る体力が残っていないような……」

「でも我慢した後の方が景色も気持ちいいだろ？」

「それはそうですけど……」

しょんぼりしつつも手を掴まれてれば大人しく付いてくるスズカを引きずってプールへ。

……あれ？

「ちよつとトレーナー。エスコートするならボクも忘れないでよねー」  
「いやエスコートというか連行……」

謎に手を掴んでくるテイオー。

「……何かあったか？」

「……いえ、なんでも」

謎に服を掴んでくるカフエ。

……いやあの、何か怪異関係なら言ってくれないと怖いんだけど。

「……………」

「…………さ、さーて行くか！」

謎に威圧感のあるアヤベとグラス。

なんで。何なんだこの微妙な空気は……。スズカだけ見てればよかつたころが懐かしい——いや、こんなに有望なウマ娘たちを見れるのはトレーナーの本懐なのだ！

……………

……………

……………

(……全く、トレーナーにも困っちゃうよねー)

考え方の違いで衝突したことは一度や二度ではない。

絶対に無敗の三冠を取りたい気持ち、カイチヨーの後を追いたい気持ちで逸る自分を真剣に諭してくれたのは忘れはしない。

夢を応援してくれる理解者であり、自分のことを大切に思ってくれて、自分のために働いてくれる。

絵空事としか思えないような無敗の三冠——『シンボリルドルフさんみたいな強くてカッコいいウマ娘になる』という夢を信じてくれた。

(そりゃあ、スズカの逃げは凄いケド。でもスズカとトレーナーに男女のどうこうとか無さそうだし。これだけアピールしてるんだからボクを見てくれてもいいと思うんだけどなー)

今はまだ、仕掛けるには早い。

恋はダービー。最終直線は長いし、差し切ると決めたら絶対に逃がすつもりはない。

(ライブル、多いんだよねー)

妙に怪我予防に熱心で、自ら被験者になってまでアグネスタキオンと何かやってるのは割と有名。

その中で比較的安全なものだけ必要な場所に持つてきてくれるので『私のことを気にかけてくれている』とか勘違いしている年頃のウマ娘がそこそこ量産されている。が、実のところスズカに、というか恐らくはスズカの怪我予防に妙なこだわりがあるだけと見た。ついでにそれもBCターフで優勝してある程度収まったようにも思える。

(スズカが無事に引退したらまた変わるカモだけど……うーん、流石に仕掛けるタイミ



ングには遅いかな)

無敗の三冠——すべては弥生賞でゲートくぐりをやらかしたスズカが手に入れなかった栄冠を掴み、そこから。

勝たせたいと思ってくれる指導者はいるだろう。夢を大切に思ってくれる人もまあいるだろう。

でも、あの人は『トウカイテイオーらしき』を大切に思ってくれているのだと感じる。不思議とそれが心地よくて、甘やかしつつもダメなもの上手く誘導してくれるあの人がいいと思う。

(——無敵のテイオー伝説には、絶対キミが必要なんだから)

だから、逃がさないよ。  
トレーナー。

## マンハッタンカフェ：1話

——ヒトは、目に見えるものしか信じられない。

そんな単純なことに気づくのが遅れるくらいには、私にとって“彼女”は自然な存在だった。怖いものから守ってくれる姉代わりであり、一緒に過ごしてくれる友人であり、走る目標。

なまじ、両親は理解があつたのも影響していた。

喫茶店には不思議なものに悩まされるお客さんで満ちていたし、私自身も“お友達”とともに解決の一助になったこともある。

だからだろう。

理解してくれないヒトよりも「お友達」の方が大事だったし、それでいいと思っていた。私が他のヒトと違うとしても、独りではないのだから。

「——とはいえ、少しばかり難儀ですね」

トレーナー。

トウインクルシリーズに参加するには不可欠なそれが、いない。

一応何度も声は掛けられたのだけれど、「お友達」の話を理解してはもらえず不気味がられて契約には至らずというのを繰り返している。

『カフェも頑固だよな、私がしばらく引っ込んでいればいいだけの話だろう』

「それは……別に、そこまでトレーナーの必要性を感じているわけではありませんので」

“お友達” はしばらく大人しくしてるからいいだろ、と言ってくれるが意外と面倒見

がよくてマメな彼女からすればそれはけつこうな苦痛だろう。そこまでして走りたいのか、と言われるとイマイチ踏み切れない。というか見知らぬトレーナーと“彼女”のどちらと話したいか、と言われるれば答えは決まっている。

「……………とりあえず、今夜も走りましょう」

『おつ、いいね。少しは齒ごたえのある走りを見せて欲しいな』

「むっ、言いますね」

『だって私の方が速いし』

カフェもトレーナーくらいしないと私には勝てねーぞ。とニヤニヤしながら煽ってくる彼女だが、そんなことは分かっている。でも、師匠になれそうな人材はいるのだ。

『おいカフェ、私に師匠役とか求めるなよ。突然変異』とか『何かの間違い』とまで言われたこの私は教えるのが大の苦手なんだ』

「知ってます。子どもの頃に聞いたら擬音ばかりで理解できなかったのを覚えてますの  
で」

「ここでぎゅーん、と踏み込んでドパーン！ と行くんだよ！ さあ行け！ と言われ  
た子どもの私はさぞ困惑した顔をしていただろう。」

『覚えてるのかよ。じゃあそんな「お前が教えるボケ」みたいな顔すんなよ……』

「そんな顔はしていませんが。……単純に、間違ってる箇所の指摘くらいなら貴方の語  
彙力でも足りるのではと思っただけです」

『お前の脚のシュつとするのがもうちよいギャン、つていかないか？』

「……すみません、通訳の心当たりは？」

『そりやもちろんトレーナーよ』

「……正直、貴方の通訳ができるトレーナーがいれば即担当してもらいたいですね」

何といつても声が聞こえないし、言ってる内容も意味不明なので二重に無理だ。私が入って通訳してもらうのは――……流石に、少し嫌ですし。

「やれやれだぜ」みたいな顔をしている彼女に、「やれやれですね」と心の中で呟いた。

……

……

……

夜。

トレセン学園のグラウンドは基本的に門限までは自由に使うことができる。

とはいえ誰もいない時でないとなく「お友達と」への挑戦はやりにくいのと、時間的に夜の方が力を発揮しやすいので一番都合がいい時間である。

『よっし、じゃあコイン任せた』

「……………今日は追いついてみせます」

当然、コイントスは彼女に任せるわけにはいかないのです、少し手慣れてしまった感がある動きでコインを投げ。

『——やってみせろよ。俺に追いつけたらアメリカ三冠も夢じゃないぜ』

「……………凄いですね」

割と大言壮語なところがあるお友達にちよつと冷めた目線を送りつつ、コインが地面に付くと同時にスタート。距離は長距離……だと彼女が辛いので2400で。

『じゃ、ゴールで待ってるぜ』



「……っ」

するりとスタートした彼女は傍目に見ても素晴らしいペースで前へ。

どちらかというと末脚に自信があるので差しの作戦で行くが、焦りはある。とはいえず、いつも手加減しているのか追いつきそうになると余裕で引き離されるのだけだ。

（—— やっぱり、速い）

力強い、自由な、*“彼女”*らしい走り。

私もあんな風に走りたいと思う。けれど——。

—— 遠い。

普段よりも引き離されているような感じすらある。  
届かない。近づけない。

(置いていかれたく、ないのに)

そのまま差を詰められずゴール——ざっくりと7〜8バ身くらいは差をつけられての敗北に、歯がゆさを感じる。

『なあ、カフェ。このままじゃダメだ』

「……………」

『私のことを考えてくれるのは嬉しい。けどな、私だつてカフェのことを考えてる。このまま私の影だけ追いかけても、お前は——』

「……分かっていきます。でも——」

大切なものを分かってくれないヒトと、仲良くするのは難しい。

ただそれだけのこと。譲れない、譲りたくないものが他のヒトには見えないものだけ。でも、これまで一緒に積み重ねた思い出も、喫茶店のお客さんの笑顔も、間違いなんかじゃないと信じたい。

だから、私は——。

「——いいレースだったな」

不意に背後から聞こえた若い男の人の声に、思わず耳を伏せる。

もしかして怪異の類かと身構えると、その人はちよつと傷ついた顔でトレーナーバツジを指さした。

「悪いけどそろそろ門限だからな、一応注意させてもらうぞ」

「……それは、どうも」

「いや、俺の担当も門限破りの常習犯でね。今ちようど送ってきたところだから――

ん？」

「？」

ああ、いつも栗毛の人の練習を見ているトレーナーさん。いつも朝から晩まで走ろうとする担当に手を焼いていたのですごく見覚えがあつた。

そして向こうも暗闇であまり見えていなかったのか、その人はある程度近づくとちよつと意外そうな顔で言った。



「悪口じゃん」

『だよな！ まあ走りでも黙らせてやったけど』

「うーんさっきの走りじゃ納得だな。俺も正直教えられることとか無いし」

『だろいな』

「うわ、すげえ自信……というか自負か」

「え？ あのこと……え？」

なんで普通に会話してるんですか……？

いやまあ、普通に見えるのなら会話するのはおかしいことではないですが。

『カフェの走りさー、もつとこう、ギユワッ！ デユワッ！ って感じがいいよな』

「末脚もつと溜めろって？ ……いやでも、そもそももつと長い距離の方が良くないか？」

『それはまあそうだけどさー。長距離専門は辛いし』

「うーん、俺の担当がハイペースで脚溜める天才だから一緒に練習してみる？」

なんで普通に会話が通じてるんですか……？

真面目な顔で話し込んでいる二人にちよつと愕然としている間に話が進んでいた。

『よし、お前カフェのトレーナーな！』

「いや、俺新人トレーナーだしもう担当いるんだけど？」

『は？ なんとかしろよトレーナーだろ』

「理不尽…!!? とうるかマンハッタンカフェさんに選ぶ権利があるだろ」

「……………その、ご迷惑をおかけするわけには」

新人トレーナーが複数担当するなんて普通はないですし。

『というかお前、安全のためにも契約した方がいいと思うぞ。むしろ私が見えるくらい  
霊感あつてよく無事だったな』

「えっ、何それ怖い」

「それは確かに」

「え？ 何？ それで納得しちゃうくらいには危険なの？」

「……………まあ、そうですね」

深淵を見ている時、深淵もこちらを見ている、なんて言葉があるくらいには危ない。  
実は凄い不幸体質とか、じわじわと悪霊に弱らされているとか、そんな心配は正直など



ころある。

……いえ、本当に。何なんでしょうかこの人は。

ちよつと珍妙な生物に見えてきた。

「担当はともかく、少し経過観察させていただいても…？」  
「怖いんだけど…!? いやもうぜひお願いします」

---

ライディングデュエル  
競馬

それはスピードの世界で進化した決闘。  
デュエル

そこに命を懸ける伝説の血統あかしを受け継ぐものたちを、人々は競走馬サラブレッドと呼んだ――。

そして、そんな世界に生まれたとある魂を受け継いでトレーナーを目指す男が一人。  
レースの世界に魅入られ、悲劇を未然に防ごうと思いつつも現実の厳しさに負けそう  
だったその男が出会ったウマ娘こそが、サイレンススズカだった――。

そんな感じの出自であるため、お化けとか心霊現象には割と理解がある方である。  
とうるかウマ娘はよく知ってたし。スズカのトレーニングにもかなりそのへんの知  
識は使わせてもらった。そのため、マンハッタンカフェさんと「お友達」に關しても理

解は深い方だと思っていたし、ついつい気になって踏み込んでしまったわけだが――

いつもウマ娘たちが門限ギリギリまで粘って練習している寂れたコース。そこに普段通り訪れてみると、なんだか雰囲気が変わっていた。

『おはよう(ぎん)いま——ひえっ』

「あ、おはよう」

?

いつも挨拶している鹿毛のウマ娘が何かにおびえるように尻尾を逆立てて耳を伏せた。

視線の先には「お友達」が。ま、まさか――。

「見えてる、だと…!？」

こんなに身近にお仲間が!？」

驚いていると『お友だち』がいるから当然、というわけでもないだろうがマンハッタンカフェも現れた。

「……いえ、むしろそちらの方も「彼女の側」ですので……」

『……はあ、なるほど。こいつらのトレーナー……までいかずとも、アドバイザーをしてるからそれなりに守られてたわけか』

「ですが彼女たちも執着心が芽生えたと……まあ、その。連れていかれるトレーナーも多いので気を付けるべきかと」

え？

……死んじゃったの？

タイムも良くなって、これからが楽しみな一人だったのに。  
そうか。……そっかあ。

『……その、ごめんなさい』

「……いや、俺こそごめん」

身内でしかやらない、門限ギリギリの夜のレース。  
その謎が解けてしまった…。

「……走りに未練を残したウマ娘は、少なくともありません。最近は何やら楽しそうにして

いると思ってはいましたが——」

『……………すみません、私はもう——』

「——いや、待てよ!? ——なあ、この子伝説的なウマ娘だからみんなで挑戦しようぜ!」

し。 “お友達” の正体が恐らく “彼” のウマソウルないしウマ娘であるのは間違いない。

近代日本競馬を作り上げた最強のリーディングサイアーへの挑戦とか、楽しそうじゃないか……! というか俺が聞いてないだけで日本の名馬のウマ娘が紛れ込んでたかもしれないとか気になるし!

『えっ』

『…………おつ、カフェの参考くらいにはなるか?』

割と「お友達」も乗り気である。

これはいける……！ 一緒に練習したんだ、『最強』に一泡吹かせてやるぜ……！

……

……

……

—— やっぱりSSには勝てなかったよ……。

強い、ひたすらに強い。

その無敵っぷりに蹂躪され、けれども必死で鎬を削るウマ娘たちは普段以上に生き生きとしていた。

『よしお前ら、トレセン学園の裏の風紀は私たちが守るから承知しておくように』  
『『『』はいっ』』』

なんかみんな舎弟にされてる気もするが。さすが運命に噛みついたウマ。  
そんな彼女たちを、マンハッタンカフェは少しばかり優し気な目で見ていた。

「……………面白い人ですね」

「ほんとにな。さすが“お友達”」

「……………きつと、純粹に走りが好きなんですネ」



そしてそれから、色々ありつつもマンハッタンカフェとの付き合いは増えていくことになるのであった……。。